

踏み台が己を自覚した結果ww【二次創作】

エイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

<https://syosetu.org/novel/130752/>の「踏み台が己を自覚した結果ww」二次創作です。

書き手の方に多大な感謝を。

追記・原作の後書きの、「誰か代わりに書いてくれてもいい〜」という一文を根拠に二次創作しています。何かあればご連絡ください。

追記2：作者様からの許可を頂きました。

目次

兄（踏み台）と弟（英雄）が同じクラスだったら	1
兄（踏み台）のみがSクラスだったら	13
兄（踏み台）と弟（英雄）のみが同じクラスだったら	24

兄（踏み台）と弟（英雄）が同じクラスだったら

この俺踏み台ことウルカヌス・イグニスはクラス分け試験を堂々トップで終わらせ、Sクラスに確定した。

妹マリナは6枚を抜いて、7枚目にヒビを入れギリギリ同じSクラス。

そして、我が弟こと英雄の卵たる少年の一撃は壁10枚を抜き、1枚目に達して力尽き同じくSクラス。

その同伴たる少女、青髪の美少女は7枚を鮮やかに破壊し同じくSクラスである。

他の者は全て5枚以下で、そのままAからCまでにクラス分けされた。

つまり、俺のいるSクラスはたったの4人だ。

これでも多い方らしいので、学園側は、今年は英雄候補が豊作だ、大漁だ、とほくほくしていた。農業なのか漁業なのかはつきりしてほしいもんである。

「お兄様！ 私、やりましたわ！」

「ああ、よくやった。だが、今の己に安居するな。常に上を目指す姿勢を忘れずに過ごせ」

なんとと言っても気の毒だが、妹も俺と同じく踏み台だろうからね

おまえ

！
そう思うと、無邪気と言ってもいいくらい明るく喜ぶ妹を邪険にもできない。だがしかし、先に踏み台の自覚を持った先輩として兄として、ここは厳しく言わねばならんだ。

俺はお前を自業自得でもある踏み台としての運命から救ってはやれないが、せめて良き踏み台としての見本をみせてやることはできる。許せ、妹よ。

と、たしなめると、目を輝かせて「さすがお兄様はストイックでいらっしやるのね」と喜んだ。

可愛い妹だ。

だが、しかし。

そう、しかし。

可愛いのは、俺の前だけであることくらいは知っている。

あいにくと、そこまで鈍感にはなれない。

具体的には隠されていても、陰惨な真似もこれまでやらかしている差別主義者であることは知っている。

正確に言えば、自分の一言で、差別している相手がどうなっても気にしないという性格なので、自らの手を汚すタイプではないのだが。庇って言うのであれば、強者に対してはそれなりに敬意を示さないこともないのだが。

「ブン。成り上が、いえ、平民にしてはなかなかだわ」

とはいえ、このように上位者としての態度を崩さず、下位に対する評価でしかない。

言われた側である青髪の少年と少女は顔色も変えずに一礼した。

つまり、これマリナがこういう性格であるときつちりしつかり知られてるってことだ。

少女の動作は優雅で付け焼き刃感はない。だが、貴族名鑑を暗記してる俺に見覚えがないってことは貴族じゃない可能性が高い。しかし、そんなじゃそこの豪商ではこういう教育は難しい。こういう教育をしようという発想がないからだ。

つまり、最低限3代以上は続いている豪商あたりか。ふむ、妾腹か下位貴族という可能性もなくはない。

身につけている物は全て上質だが地味だ。こういう趣味は原初の四精霊の一、水の原始精霊を祖に持つ家系に多い。髪色の特徴もだけど。

彼らは理性と公平を尊ぶ傾向にあり、逆に言えば、知性のない者を忌避する、場合によっては見下す性質にある。

と、ここまできを読み取った俺の前で、顔をあげた少女が名乗った。「私、セレス・ラクスと申します。火だけではなく水や地、風まで万物の魔法に通じ、”闇を照らす光”と名高いお方と同じクラスになれて光栄ですわ」

微笑む彼女は、マリナをガン無視。

おお、すごいな。最初っから喧嘩を売ってくるか。

いや、こうして彼女とマリナが反目し、マリナが彼女に対して権力を傘にきた行為をしようとした瞬間に弟が現れてさっそうと彼女を救い出すというパターンだろうか。王道だ。

妹よ、もしや、踏み台だけではなく、当て馬役も担ってるのか。恋のキューピッド役か。それはそれでいいな。

踏み台としては一人前と自認したところだ。俺もそっち狙ってみよう。

弟のほうは、なぜか顔をそむけてこつちを見ようとしなさい。さみしい。

安心してくれていいのに。

俺は踏み台としての任務を果たすため、お前が望むまでは決してお前の正体に気づいたりしないぞ。むしろ、弟のハーレム作成応援に向けて新たな修行に励むつもりだから忙しい。

「そうか。既に知っているようだが、俺はウルカヌス・イグニス。こつちはマリナ・イグニス。妹だ」

「このような者たちに、お兄様から名乗られなくても……!」

「前々から言っているが、学園にいる以上は対等だ。違いの差は何をしたかで示せ」

「ですけれど……!」

「マリナ」

名を呼べば、妹の喉がひくついた。

あ、ごめん、そんなに怒ってないから。大丈夫だから。

「淑女として振る舞え」

言い終えれば、何をどう解釈したのか顔が明るくなった。

まあ、以後は一応友好的になったからよしとしよう。

ここで解説をしておく、リュミエール学園は、学校ではあるが、それだけではない。

かつて、この地は混沌の森と同じく、強力な魔物の跋扈する闇の地

だったという。

それを、封印と浄化を繰り返し、その上で光の地たらしめるために王族から必ず一名が常駐するようになったのが始まりだ。

王族を守るために騎士が配置され、封印を強化するために魔術士が配置され、彼らの必要とする物資を供給する者たちも同時に移住し、もはや一つの都市と言っている。

ここは、騎士の修業の場であり、魔術士の術の研究場所であり、かつての戦いにおいて功績を立てた者たちを慰撫する墓所であり、王族も貴族も平民もなく戦った珍しい場所でもある。

ゆえに、学園内ではすべてが平等であり対等。

かつては本当にそうだったし、今も少なくとも理念上はそうであるはずだ。

「ゴホン、私がSクラスの指導をするグラニート・イグニスだ」

あれ、叔父様、久しいな。

名字から分かる通り血縁だ。このクラスにイグニス姓が2人もいるからこそその配慮。学園側からの特別のはからい。

分かるぞ。

俺は分かっている。

かつて一族から放逐された弟^{英雄}を実は心配していた、一族内の良心枠だな！

今が序章、第1話くらいでしたら、おそらく10話目くらいで魔獣に襲われた主人公一行を身を挺して助け、信用を勝ち取るやつだ。

そして、主人公達を見捨てた俺達を叱りつけるパターンだろう。

ただな。

問題があつてな。

そんなに強力な魔獣ってまだ残ってたか……？

近隣の、俺でも足手まといを守って戦うほどの余裕がなく苦戦するような魔獣は、もう全部討伐してしまつて……いや、運命は英雄に試練を与えるものだし、どうにかなるだろう。うん。

「Sクラスであるお前たちには、基本的に私から指導するのではなく、課題を得て、その課題にどう対応するかを評価の対象とする」

教師が男性である以上、第3ヒロインは同学年の誰かか、下級生か、上級生もありうるが、まあ教師枠からは消えたと見た。

うーん、しかし学園長は妙齢の女性だからな。油断はできない。

俺も踏み台はもちろん、当て馬役も見事にこなしてみせよう。

安心しろ、弟よ。^{英雄}

6年の努力は伊達じゃない。

「個人単位はともかく、グループ単位での課題は私が出す。むろん、その課題を自ら定めてもいい。ただし報告は必須だ。報告がない場合は、勝手な活動として評価されないばかりか、場合によってはクラス落ちだから気をつけるように」

教師の言葉を右から左に聞き流しながら、青髪の謎の○少年のほうを見やると、すごい勢いで首をそらされた。

何だろう。

寝ぐせでもついていたかと思っただが、そんなものがあつたら誰かに言われる気もする。

「グループですって？ 私にお兄様以外と組めとおっしゃるの？ それもその貧相な平民と？」

マリナが柳眉を逆立てた。

青髪の少年も不愉快そうな光を瞳に浮かべ、少女はうつすらと感情の見えない微笑みを深めた。

そういえば、自己紹介してもらってないから、まだ俺は弟の偽名を知らない。

「その通りだ。公と私を分け、協力できるかどうか見せてもらおう。必要な時に必要な力を発揮するためにな」

どんな名前だろう。

ここはやはり、壮大で、未来の英雄にふさわしい華やかさが求められるところだが、偽名というところを鑑みれば地味で目立たないものでもロマンはある。

隠れ潜む臥薪嘗胆の時期。英雄のロマンじゃね。

「ではまず、ウルカヌス・イグニスとシルバー・ラクスの組と、マリナ・イグニスとセレスター・ラクスの組だ」

「なっ、その女とですって！　いくら叔父様でも横暴が過ぎましてよ！」

シルバーというのか。

光の闇の境界線たる灰もいいが幽闇を彷徨う銀月というのもいいな。

夜の世界に星々とともに歩み、光をもたらず。

闇のものでありながら、光を跳ね返す光のものでもある。

いいじゃないか。

「マリナ」

「だって、お兄様！　初めてのグループ分けでお兄様と一緒にじゃないなんて！　しかも、この女となんて！」

「彼女とでなければ納得するか？」

「誰だって、この女よりマシですわよ！」

「分かった」

頷いて、俺は叔父をみやった。

本来なら先生と呼ばせるべきだが、それは後からにしよう。今は何を言っても聞くまい。

「すまないが、今回は譲ってくれないか。次はない」

「いいだろう」

叔父の表情からして、たぶん、分かっているやっただのだ。俺の提案も考えのうちだろう。

そうでないとしても、俺が提案した以上は無下にはできない。

「では、俺とセレスタ、マリナとシルバーの組み合わせに変更だ」

「課題が終わればまた変えるからそのつもりで」

叔父が俺の言葉に続く前に、カタン、とシルバーが手でもてあそんでいたペンを落とす。絶妙なまでの配置を誇る顔のなかで、目がわずかに見開かれて、少しばかり幼い印象になった。

セレスタも口元を手で覆って驚いた様子だ。

マリナはいわずもがな憤怒の形相になったが、「淑女」と俺がつぶやいた途端に、微笑みになった。口の端が引きつってたので減点。

最初の課題は”混沌の森”の探索。

そう、俺にとつても弟にとつても因縁のあるあの森だ。力試しと言ったところだろう。俺以外の者の。

自分で言うのもなんだが、俺は研究されまくっているので力試しも何も、俺以外の奴のほうが俺について詳しくかったりする。正しいかどうかはさておいて。

ただし、もちろん奥の手は存在する。

”こんな事もあるうかと”は魅力ワードとしては渋いが、俺は前向きに評価したい。頑張つて3つも作ったんだし。

ああ、弟よ。^{英雄}

^{踏み台}俺の奥の手くらはいは鼻で笑つて踏み越えていけ。お前にはそれができる^{と知っている}。

なに、お前のために作ったものだ。遠慮はいらない。まだ作る予定だし。

「ウルカヌス様」

「何だ」

「手慣れてらつしゃいますね」

「何度も来たことがあるからな。セレストは初めてか」

「辺縁部なら何度か。ですけど、火を起こせるような拠点を作つてある方なんて初めて見ました」

呼び捨てで構わないと森に来るまでの間に言ったのだが、袋叩きに合いたくないからやめておくと微笑まれてしまった。

さもあらん。俺にはこう見えてファンもいるのである。妹が^{マリナ}総元締めな時点で、どういう団体かは察せられる。

うーん、ありとあらゆる名声と名誉と求め続けたことに悔いはないし、それを乗り越えてこそその英雄だとも思っているが、万が一にも弟^{英雄}が誹謗されぬよう、多少なりとも納得されやすいように俺からもフラグを立てておくべきか。

そう考えれば、今回マリナとシルバーを組ませたのは存外良い方向に働くかもしれない。マリナよ、しっかり籠絡されてこい。目指せ第

三ヒロインだ。そうすれば踏み台ではなくなる運命もあるかもしれないぞ。

拠点とセレスタは言ったが、それほどのものでもない。

俺が前々から利用している野営地に案内して火を起こしただけである。

混沌の森は、魔獣が問題なだけで、それ以外は非常に豊かな森だ。毒ガス地帯や毒草もあるが、人が食べられる果樹があり、飲める水質の泉があり、どういった作用か、いかなる厳冬も苛夏も森のなかでは多少和らぐ。

「魔獣を」だけ」と表現できるのは、ウルカヌス様くらいだと思いますの」

森に入って数時間、慣れてきたのか、青髪の少女セレスタも割と普通に話してくれるようになってきた。

そう、たかだか5、6時間歩いたくらいで着ける場所なのである。

入り口からほど近い丘を迂回して、細い沢を遡り、岩場に分け入り、灌木の茂みをかき分けて進めば、やがては岩にしがみついた楠の根本に湧いた泉の畔ほとりに出る。

巨大に育った楠の枝がドームのように泉の上空を覆って太陽を遮っているため、いつでも薄暗い。岩場で、しかも光がないから植物が水辺だというのにほとんど育たない。

一段低い場所にあるため、一見しただけでは、そんな場所があることすら分らないだろう。

俺は、何度か来るうちに作った粗末な石組みの竈かまどに道中拾ってきた枝を放り込みながらセレスタに答えた。

「慣れている、と言っただろう」

そう、なんで野営地を作ってあるほどに、俺がここに慣れているかと言うと、度々来ていたからである。

具体的に言うと、”俺は英雄になれるのでは?”とか”弟は英雄ではないのでは?”なんて疑いがこみ上げてきた時は、ここに来ていた。

第二王女を助けた後が一番ひどかった。

一週間もこもったのはさすがに初めてだったからな。

最初にここに来たのはいつだっただろう。

もはや忘れたが、弟をここに棄てたと聞いてからかなりの時間が経っていたのは分かっている。

そして、俺は、

……3時間ほどで逃げ帰った。

水も食料もなく、武器と身のみで入ったのだから潮時といえは潮時だが、そうじゃない。ひっきりなしに襲ってくる魔獣に恐れ慄いて、これ以上こんな所にはいられないと逃げ帰ったのだ。

これをもつて、英雄の器ではないことを心底実感した。

周りは幼い身で、3時間も森の中で耐え抜き、しかもほぼ無傷で帰還したことを褒め称えたが、冗談じゃない。

——弟はまだ9歳だった。

——弟は魔法も使えなかった。

——弟は剣も持っていないかった。

——弟は、帰る道も、何もなかった……。

ああ、それはつまり、弟が英雄でなければ死んでいるということだ。これは俺を一番打ちのめした。

魔獣の恐怖も、毒ガスエリアに突っ込むところだった衝撃も、何ほどのものか。

弟は——英雄でなければ、死ぬのだ……。

踏み台としての覚悟が揺らぐ度に、俺は同じことを繰り返して、俺が英雄としての器ではないこと、弟が生きるためには英雄でなければならぬことを再確認し、人の世界にもどった。

この野営地の準備の良さは、俺の未熟さを表すものでしかない。

まあ、今回は役に立ったが。

「そんなにここに通っているなんて、何か理由がございますの？」

「探しものがあつた。見つからないことは知っていたが」

「見つからないと分かっている、それでも？」

「分かっているなお、僅かな可能性を諦めきれなかった。フツ、未練だな」

えーっと、これ、どこまで答えていいんだろうか。

彼女はどこまで知ってるんだろう。

俺は俺が英雄であつてもよい理由を探してここに来ていた。そして、その度に打ち砕かれて、俺は俺だ踏み台と爽やかな喜びを実感していたわけだから、裏返せば踏み台である理由を探しに来ていたと言つてもいいだろう。

そういう意味では、俺の探しものは毎踏み台回見理由つかつてるとも見英雄つかつてないとも言える。

「幼い頃から神童とたたえられ、英雄としての道を歩むウルカヌス様でも未練はございますのね」

その言葉には答えずに、竈かまどに放り込んだ枝から、よく燃えるように水分を抜く。

実を言うと、イグニス家の直系である俺は火の精霊との相性が最も良いため、わざわざ火を熾おこさなくても火が必要な事柄は何とでもなるのだが、それでも火は焚いておくべきだ。

だって、そのほうが冒険者っぽい、いやいや、英雄の踏み台ともあろうものが火も起こせないなんて恥ずかしいからな。

「水精は離れ集う」

指先に集まってきた水分を振り落とし、今度は火をつける。

使う魔力量は少なくても、その分、精密な制コントロール御が必要なので、気分が乗るという理由で俺は詠唱する。

「針先フェルのぶミカとく塵火リエンよ灯テれ」

さて、火は灯ったが、このままでは防備が不安なので結界を張る。

一番外側に呼び鈴結界、そのすぐ内側にカウンター結界。最後に防護結界の3つだ。

呼び鈴結界と呼んでるのは害意ある者や俺達に被害のありそうな物が接触したら、すぐに分かるという代物。消費魔力も少ないし結構便利だ。並大抵の隠蔽結界じゃ逃れられないよう改良してるが、終焉の精霊が力を貸すとなると分からんな。今度、対策考えよ。

カウンター結界は触れると自動的に反撃するトラップカードみたいなやつ。俺は大体、何が来ても爆発で返す。岩が落ちてきても魔獣が突進してきても対応可能な脳筋仕様。いやまあ、戦場なら死の呪い

や毒や幻覚系統の魔法にするけどな。

防護結界は読んで字の通り。物理的な壁に近い。ちよつといじつて、毒ガスや水流にも対応させてる。これを張っておかないとカウンセラー結界の爆発で、自分まで被害を受けてしまう。前に寝る場所の選択ミスって死にかけ、慌てて治療魔法作ったら、禁呪扱いになったのはご愛嬌。

「ベルデイロチャイム打ち鳴らせ警鐘」

楠の作り出す植物ドームのさらに外側、かなりの広範囲を俺の魔力が薄く覆う。魔力を見通す者ならば、細い糸の網を張ったように見えるだろう。糸と糸の隙間にも俺の魔力は充填されているが。

「コネクトバースト荒れ狂う熱量を返せ」

そのすぐ内側。樹とほとんど重なるようにまた魔力が広がっている。火の性質を帯びた魔力は赤みを帯びて、静かに敵を待っている。とはいえ、最近俺の魔力の匂いを魔獣が避けるから、ほとんど使わなかったりするが。

「ディフェンション堅固なる守御」

泉と、俺達を覆う最後の結界は、魔力を過不足なくそそぎこみ、どこにも漏れや穴がないように流れを制御する。

氷が溶けるようになめらかに、針の頭に彫像するように精密に、いかなる想像の果てより卓絶した魔法の全て。

努力を紡ぎ続けた6年間。

こともなげに行われる繊細な至高の術式。

彼はまだ、理解していない。

”英雄の器ではない”なるほど、確かにその通り。困難に際し逃げ

惑い、何度も揺らぎ信念を疑う者を英雄とは呼べないだろう。

だが、

「シルバー、いいえ、グレイ、あなたのお兄様はすごい方ですわね……。あの”混沌の森”に平然と寝泊まりしている上に、あんなに魔力を微小化して正確に広範囲に、しかも同時並行して扱うことのできる方がいらっしやるなんて……。あの前では私の魔法など、人間と土人形を比べるようなものですよ」

「気にするなと言っても難しいだろうけど。兄さんは昔からそうだったんだ。何でもできるし、手抜きもしないし、別け隔てのない……」

逃げ惑いながらも心を奮い立たせ、疑った信念をそれでも貫き通している者を、英雄と呼ばぬ者などいないのではないだろうか？

「ええ、本当にそうですわね。あの方、あなたをあの森で探していらしたようです、この6年間ずっと。見つけられない可能性を今でも探し求めているとおっしゃってましたわ」

「……兄さん、だけ、は、俺を……」

「いつか、名乗る日が来ることを祈ります」

そう、幾人いくたりとも歩みを止め羨望を抱えながらも諦める道。数多の困難を越えた先。

そこに立つ者を人は――

「（魔法で探索してはだめとは思わなかったな。魔法地図チャーターデイスでセレストアにちょうど良さそうな魔獣を探して行くのが効率がいいのに。俺が行くと、このへんの大体の魔獣は俺の匂いを覚えてるから逃げるんだよな。どうしよう）」

――人は、超人と呼んだ。

兄（踏み台）のみがSクラスだったら

この俺踏み台ことウルカヌス・イグニスはクラス分け試験を堂々トップで終わらせ、Sクラスに確定した。

結果がずば抜けているとのことで、俺一人である。

繰り返そう。

俺一人である……。

ハハツ、いいんだ。弟と同じクラスになって、英雄のたどる道筋を見つめたかったなんて贅沢は言わない。寂しいなんて我儘は言わない。俺はやがてSクラスに上がってくるであろう弟のために、踏み台としての実力を磨き続けよう。

「私があなたの担当になります。よろしくね。ウルカヌス」

「まさか、学園長御自らですか」

「ええ、あなたは、最も新しい英雄譚だもの。最高の環境を整えるべきだと判断しました」

学園長は20代後半だ。

この国ではまだまだ妙齢の女性と言っている。

学園長の地位は血筋なくして得られないが、血筋に加えて、彼女には実績がある。

加えていささかくすんではいるが金髪だ。

王族で地位と実力と人格を持ち合わせた彼女ならば、40代になるまでは適齢期と見なされて求婚が降り注ぐだろう。

かつて闇の地であったリユミエール学園に、代々最低でも一人は在り続ける王族の今代こそ彼女——
ルーチエフィニス・フォルティナーである。

「それにね、クラス分けてAクラスに個性豊かな子ばかり入ったから、イグニス先生はそちらに回したの。彼が空いていたら彼でも良かったとは思うのだけど」

「……妹が世話を掛けるようで申し訳ない」

「いいのよ。彼女の気持ちも分からなくはないわ。あなたの身内に産まれたらもはや、あなたに憧れて心酔するか、反発するかのどちらか

しかないもの。そして反発するには、あなたは輝かしすぎる」
学園長は艶やかな珊瑚色の唇で微笑んだ。

「おや、ちよつと化粧濃くない？
気のせい？」

「それに、私もあなたに興味があるの。ウフフ」

「光栄です。ですが、俺の情報など出尽くしているでしょう」

「そうね。城の占星術省にはあなた専門の部署ができたほどよ。研究は日々進んでいるわ」

ちなみに、一口に王族と言っても、二通りある。

彼女や俺が助けた第二王女のように、王族に生まれて王族として名を授けられた王族。

そして、俺のように他の一族に生まれながらも、
フォルティナの^金加護を以て王族と認められる王族だ。

即ち、血族としての王族と、種族としての王族である。

「だからこそ生まれる興味だってあるものよ。泉に映る初夏の若木の影だって、あなたみたいな目まぐるしい成長はしないわ。完成されたあなたはどれだけの巨樹になるかしら」

「生きているならば、成長は止まらぬものですよ。学園長。成長しないのは枯れ木だけです」

「言うわね。従妹が恋い焦がれるだけはあること」

学園長は王妹の娘にして、現王太子や俺の助けた第二王女の従^{いとこ}姉妹。つまり最初から^{女神}フォルティナ^{の愛し子}だ。

対して、俺の王族としての名は、
ウルクヌス・イグニア・フォルティナルとなる。

本来の一族名であるイグニス^{女神の愛し子たる火の祝福を受けしウルクヌス}をセカンドネーム化し、王族としての姓を最後にくっつけて名乗るわけだな。

この名前は、王族として動くことを求められない限りはほとんど使わない。ただし、王族に婿入りすると、これが正式名となる。嫁入りの場合も同じだ。

つまり、種族としての王族の名が、血族としての王族の名よりも基本優先される。

金髪ではない者が結婚で王族に迎えられると、姻族としての王族の名が与えられるし、王族がめつたにないことだが、降嫁または降婿した場合もまた少し違う名になるがそれは置いておこう。

「……」

「意外そうな顔ね。第二王女あの子だったら、見合いが来る度に、あれやこれやと難癖つけて断るのだけど、あなたより強い人がいいんですって」

「ただの口実でしょう。いずれは意中の方が現れるかと」

たとえば灰髪の訳あり美少年とかね。おっと、今は青髪だった。俺より強いという条件も問題なくクリアしてるしな。

肩をすくめて、本気にしていない素振りを見せると、学園長は「つれないわね」と笑った。

その微笑みを消さぬままに、眼光が真剣味を帯びる。

「さて、Sクラスとしての授業だけど、基本的にはあなたの自由にしていいわ。必要なものがあれば揃えましょう。私はそのために直接担当するのよ。どうせ許可するものを、他を経由するのは面倒ですからね」

「評価は？」

「期末ごとに結果を見せてもらいます。レポート論文でも構いませんし、新開発した魔法でも、先進魔法理論の実証でも何でも構いません」

自分で課題を決めて、自分で結までやれということか。

大学に近いな。自由度が高いのはありがたいんだけど、中等部までのように学校運営に携わるのは無理そうだ。

「ところで、ウルカヌス・イグニア・フォルティナル。あなたは私を除けば、この学園で唯一の金髪です。この意味を分かっていますか？」

「王族としての義務の話でしょうか」

「さすがですね。そのとおり、高等部からはあなたを成人王族として扱います。本来なら19歳からなのですけど、能力も人格も十分と成人王族全会一致で決定されました」

王族としての名前を呼ばれた時点で、イグニスとしての話ではないと分かっていたが、なんなんだ？

中等部と高等部の間にある、式典の間の地下のことだろうか。時々、妙な気配を足の下に感じていた。隠し扉の奥の隠し階段という二重構造で隠されていたので、好奇心で手をつけるのはやめておいたんだが。

それとも時折ある不自然な精霊達の集合事象だろうか。悪意あるものではなさそうなので放っておいたんだが。

「おいでなさい。直接見せたほうが早いでしょう。フォルティナの加護持つ者であれば、遅かれ早かれ見る可能性の高いものです」

「つまり、学園だけではない、と」

「理解が早くて結構です。学園にいるあいだは学園のものしか気にしなくて構いませんが、もし私に何かあれば、あなたがアレを守らねばなりません」

王族としての義務となるナニカか。ふむ。

それはそれとして置いて置いて、青少年としては腕に押し付けられた柔らかいものが気になります、学園長。

ねえ、ちよつと密着しすぎてない？

気のせい？

「英雄ともなると動じないわねえ。慣れてるのかしら。それともストイックなだけかしら」

「別に慣れてはいませんが、悪い見本がおりますもので」

具体的に言うと、うちのゲスな父です。

ストイックどころか、10歳までは、将来の美女ハーレムも思い描いてただけどね。

あのゲスなおっさんのせいで、イグニス家のような上の立場から迫られて断れる女性なんて、そういないって実感^{わか}っちゃったからね。セクハラだめ絶対。俺の後ろにはいっただってイグニス家の威光がある。

”自主的な意思で俺を好きになってくれるハーレムじゃなきゃヤダー。でもそういうのは英雄の特権だよ” そういうことです。そんなのは弟^{英雄}の役目であって、俺じゃない。身の程は弁えるけど胸は好きです。

「フフ、この門を成人せずつくぐるのは、剣の勇者ゴエ・モン以来では

ないかしら。彼女は金髪ではなかったけれど、王族入りが決定していたから」

「確か、後のトトウルス2世の妃となられたのでしたか」

「ええそうよ。奇運の王トトウルス2世は、幼年時代、髪を隠し市井に身を潜めておられたことで有名だけど、その時彼女にめぐりあい愛を育んだと言われているわ」

なかなか有名な話である。

ゴエ・モンがただの女性であればロマンチックな悲恋譚となったのだろうが、彼女は剣に愛されていた。なおかつトトウルス2世も、当時のさばっていた神官と貴族派を渡り歩き、最終的には一人勝ちするだけの頭脳とバランス能力の持ち主だった。それでも、二人の道のは苦難に満ちていた。

「王が、神官派に対し即位の条件として上げたのが彼女との結婚でしたね」

「それを彼らが認めたまではいいけれど、婚約式で横槍を入れたのが貴族派。王族が軽く見られていた時代だったというのが、よく分かるわね」

「高等部への主席入学と、例のクラス分け試験最上位が貴族派の出した条件だったでしょうか。精霊の血が薄く基本性能に差のある庶民に、貴族が突きつけるにしていはいぶんな条件だ。貴者の誇りがなかったと見えます」

うなずきながら、学園長は隠し階段の最下部にあった両開きの扉に手をかけた。途端に術式が三次元展開する。二極、三極、四極……十二極をもって構成するか。難易度たっかいな！

おお、加えてこいつはすごいことに、ざっと軽く見積もって15層ほど封印が重ねられている。面白いのは、これが双方の封印だということだ。普通、封印は“中から外に出る”のを閉ざすか、“外から中に入る”のを禁ずるかのどちらかになる。

ところがこれは、外に出させない、かつ、中に入らせないようになっている。

「彼女はクラス分け試験で、王配となるだけの資格を示した。つまり、

王族として、この先を見てアレを守る義務をも得たの」

「四大元素の混合魔法封印式。入る時も出る時も試される、と」

「ええ、これでも守りが薄いと思うくらいよ」

扉の封印を抜けて、さらに通路を進むと一段下がった広間のような場所に出た。四方には中央を守るための術壇があり、魔術師が大規模な封印術式に魔力を注ぎ込んでいる。

広間の中央には、球形の立体魔法術式。その中央に浮いているのは……、

——黒髪を揺蕩^{たゆた}わせ、空中に横たわり眠るように目を閉じた幼子だった。

恐らく、7，8歳だろう。

間違いない、あれは、あの気配は『終焉の精霊』だ……！

弟の傍らにいた女性と酷似している。

「あなたは終焉の精霊について、どのくらい知っているかしら」

「一般的なことなら。光の神フォルティナと敵対した闇の神カオスの創り出した唯一人の精霊。終わりを告げる者」

「ええ、そうよ。二柱の対立で、私達人間はフォルティナ側で戦い、終焉の精霊を封印した、とされている」

学園長は忌々しそうに中央の少女を睨みつけながら言葉を続けた。

「終焉の精霊は、闇の神カオスの唯一人の精霊。その封印には多くの手順を必要としたわ」

「……『困難は、分割せよ』といったところでしょうか」

デカルト先生の名言を俺は忘れていない。何をした人なのかは忘れたが。

前世の知識がどんどん薄れていく中、ピンポイントで妙なことばかり覚えてるんだよな。

「末恐ろしい洞察力ね。そのとおりよ。フォルティナ側の精霊、聖獣、私達人間をも含んだありとあらゆる種族の力を結集して、終焉の精霊は『肉体』と『精神』と『記憶』に分離させられ、さらに細分化して封印されたわ」

「ふむ、ああ、なるほど。たとえば学園、たとえば混沌の森、たとえば

狂惑の湖、たとえば邪気の湿原などに？」

学園長はためいきをつけて、俺を軽く睨んだ。

「王族がいればこそ、ここは闇の地に戻らないのよ。これだけの封印からでさえ彼女の力は漏れ出ている。復活したいという彼女の願いは闇の神力オスの力を引き寄せるの」

「では、やはり、彼女が終焉の精霊ですか」

「正確に言えば、その一部を封印された呪物よ。終焉の精霊の一部を身に宿されたがゆえに世界の終わりまで死ねない、歴史より抹殺された王女モルストート」

「……なぜ」

「終焉の精霊は死なないからよ。この世の最後の最後まで、全ての生物に死を与え終わりを告げ続けるのが彼女の役割。ゆえに終焉の精霊を宿し、内側から終焉の精霊に侵蝕され続けている彼女も死なない。もはや彼女は終焉の精霊の分体に等しい」

俺の体は震えていた。

つばを飲み込む音が、学園長に聞こえないように、気を払う。

学園長は、恐れを噛み殺しながらも目を離せないようだった。

「おぞましいでしょうね。分かるわ」

「むごい、とは思いますが。まだ幼い王女が好んであなっただとは思えません」

「……もはやほとんど彼女に関しては語り継がれていないけれど、生来の髪の色は灰色だったらしいの。身の潔白を示すために、闇の神力オスに近いものではないと示すために、自ら封印の器に志願したと、聞いているわ」

言いながらも語尾が弱くなって、視線も憐れみを帯びた。同情してしまうが、同情してはいけないという自制心の働いているような顔だった。

ああ、しかし。

そう、しかし。

そんなことはどうでもいい。

俺の体が震えている。

興奮のあまり震えている。
歓喜のあまり震えている。

ああ、ああ、ああ、弟よ、喜べッ！

今、俺が見ている彼女こそが、お前が英雄となるために、運命が用意したレベルアップワンダリンググモンスターだ！

あるいは固定ボスと呼んでもいいが。

ああ、目に浮かぶようだ。

何話目になるかは分からないが、封印が解けて動き出す彼女。

人としての自我はすでに飲まれ、かといつて終焉の精霊にもなりきれない哀れな王女。

彼女に慈悲と手を差し伸べながらも、救いきれずに悔涙をこぼす英雄^弟と、それを見て心打たれるヒロイン達。そして力を合わせて起こされる——奇跡。

ふっふっふ、想像するだけでも胸が躍る。

ああ、だつて、弟が救おうとせぬはずがない。

同じく光^灰と闇^色の間の色を持ち。

同じく終焉の精霊に縁を持ち。

同じように迫害され。

同じように救われる、ことのなかつた彼女を、救いたいと思わぬはずがない。

同じように捨てられた彼女を、捨てられた側である弟が捨てるとは思えない。

まるで運命のように、いいや、これぞ運命に違いない。弟が捨てられた年とさほど変わらない彼女は、きつと弟に救われるためにここにいた。

「私達は封印を守らねばならないわ。たとえ歴史に隠された真実がどうであれ、もはや彼女をここから出してはいけない。終焉の精霊の封印はゆるみ、あなたの言ったとおり、分かりやすく世に影響し始めている」

学園長は、重苦しく言葉を続けた。

「それでも彼女の欠片が復活しないのは、単に手順を踏むことができ

ないから。すなわちほとんど封印は解けていて、後は手となり足となる存在があれば、もう出てこれる状況なのよ。私達の世代は戦いを目前にしていると言ってもいいわ」

ああ、それで理解した。

弟が終焉の精霊を連れて、学園にやってきた理由を。

わざわざ試験を受けて、この学園に潜入した理由を。

混沌の森から最も近く、最も解放しやすいと思ったのだろうか。

なんて、素晴らしい。

俺は、一目見て、俺には救えないと分かった少女に微笑みかけた。

もしも俺がやるのなら、きつと殺すことでしか救えない。その体を粉碎し、再生する端から木っ端微塵に打ち砕き、無理矢理にでも終焉の精霊の欠片を分離させ消滅させてやることくらいしか、俺には君を救う手段はない。

だが、大丈夫だ、俺には救えないが弟には救える。

俺にですらこの^{踏み台}程度の救いは与えてやれるのだから、弟であれば、きつともつと素晴らしい、全てが救われる道筋を君に示してくれるだろう。きつと。

さて、そうと決まれば彼女をどうやって解放するか考えなければならぬ。

彼女を解放しないと、弟の物語は頓挫してしまうだろうから。

とりあえず、前期の研究課題は「封印魔法について」にしよう。

と、俺が決めた頃には、学園長は既に去っていた。

正直、最後に何を話していたか記憶にない。ずっと考えてたからな。

やる気に燃える握り拳は興奮でわずかに震え、頬はにやけを押さええるために引きつっているせいか、学園長から微妙な目で見られてしまったような記憶はうっすらある。反省せねば。完璧な踏み台は人から不審な目で見られたりはしないものだ。俺 i s 完璧！^{パーフェクト}でなければ。

気合を入れなおした彼は、まだ何も理解していなかった。
”俺の後ろにはいつだってイグニス家の威光がある” なるほど、確かにその通り。今や世に知らぬ者なきウルカヌス・イグニスに、その家門の威勢を感じぬものはいないだろう。

だが、

「羨ましいわ。ルーチエフィニス。あなたは彼のそばにいつでもいられるのですもの。もちろんあなたが私情を仕事に持ち込まないってことは知っているけれど」

「ふふ、殿下も来年は高等部に入学なさるのでしょう。Sクラスに所属できるよう、自らを研磨なさってはいかがですか。多少は接点ができると思いますわ」

「もう、意地悪言わないでくださいな」

「彼は、闇の精霊の欠片にすら憐憫と義憤を示す素晴らしい人。ねえもっと頑張ってくれないと本気出しちゃうわよ従妹殿？」

イグニス家よりも上位にある者には、その威光は通じない。
そして、

「(そういえば、森から出て最初に潜入するのが、どうしてここだったのよ？ 憎たらしい家族に会う危険性だってあったし、遠くても他のところのほうがよかつたんじゃない？ わたしはどこでもいいんだけど)」

「兄さんを、見てみたかった」

「(デレた！)」

「デレてない！」

「(やれやれ、わたしも興味湧いてきちゃった。イグニス家なんて、滅ぼすつもりしかなかったんだけどな。彼はちよっとおもしろそう)」

イグニス家に敵対する相手には、その威光はむしろ逆効果だ。

否、いつそ不倶戴天とも言えるであろう相手の興味さえも惹いてしまふのならば、それはもうイグニス家の威光の問題ではないのではないだろうか？

「お兄様にふさわしくない妹であってはいけないの。私は、マリナ・イ

グニスなのだから。平民ごときに負けていてはお兄様まで笑わ
れちゃうわ……！」

「我が息子ながら、あれは傑物よ。いずれは我がイグニス家が王家に
取って代わることも夢ではないぞ。ハハ、ハハハハハハッ」

そう、誰もが惹かれざるを得ない輝き。遙かなる高み。

そんな光輝を人は――

「さて、どうせなら華々しくやりたい。危機に陥った学園長を助ける
ところとか見たい。別クラスで成長を見られないんだから、ちよつと
くらい派手にやってもいいよな」

――人は、巨星と呼んだ

兄（踏み台）と弟（英雄）のみが同じクラスだったら

この俺踏み台ことウルカヌス・イグニスはクラス分け試験を堂々
トップで終わらせ、Sクラスに確定した。

俺と、十枚を突破し十一枚にも手を伸ばした我が弟と思しき少年の
二人だけのクラスである。

そう、二人だけなのである。

該当者がいなければ存在しないこともあるSクラスとしては、普通
の人数らしい。

つまり——教室には、俺と彼の二人きりなのである。

繰り返す。

二人きりだ。

二人きりなのだ。

いや、まあ、そんなことはどうでもいいと言えはいいのだが、それ
でも俺は心臓を押さえた。これは断罪におびえる恐怖か、はたまた英
雄譚に立ち会える期待か、自分でも分からない。

もしや、これこそ踏み台として試される最初の一步なのではない
か、とドキドキしていたら、不思議に弟（仮）は頑なにこちらを見よ
うとしなかった。同じ教室にいるのに不自然なほどに視線をよこさ
ない。

黒髪の精霊が頬をつついたり、耳に息を吹き込んだり、こそこそ話
しかけたりしている風情なのだが頑として無視を貫いている。どう
した、フラグを折る気なのか？ と見てるこっちも別の意味での不安
が湧いてくる。身バレがやっぱり嫌なんだろうか。お前を英雄とし
て覚醒させるまで、誰にも言わないから安心してきていいのだが。

あ、俺としては、弟が幸せならハーレムを応援します。権力に驕おごっ
て女性を囲う父とは話が違う。得られたはずの家族の愛情を、愛情が
無理なら保護を、保護が無理ならせめて無視してくれれば生きていら
れたものを、全て拒否され捨てられたんだぞ。英雄でなければ、本来
なら死んでいる。その分の愛情と幸福をぜひ補ってあげてほしい兄

心。質も大事だが量も大事だ。

「ちよつと、憧れの兄さんと同クラスなんでしょ。せつかく別人になってるんだから話しかけたら？」

「うるさい」

「大丈夫よ。彼が精霊の眼でも持つてない限り、貴方の変装の不自然さなんて見破れないし、わたしだって見えてないわよ」

「うるさい。分かってもらえなかったら分かってもらえなかったで……つらいだろ」

「まーやだ、こじらせてる！」

「こじらせてねえ！」

我が妹マリナは、青髪の少女と同じくAクラスだった。

まあそりやそうだ。彼女は試練の壁を七枚破壊して、妹は六枚だけ。いくらイグニス家の者でもSクラスにはなれない。仮になれらしたら青髪の少女とともにでなければならぬ。あの試験は、外部公開されているので、それなりに公正である。

「それなら、いつそ分かってもらつて味方になつてもらつたら？」

「無理だろ」

「(なんでよ)」

「(お前の目的も俺の目的も、兄さんに害を与えるものでしかないだろ。兄さんはこの国の一番新しい英雄で、イグニス家次期当主だ)」

「(むむ、それはそうよね。うーん、本当の肉体を取り戻したいなあ。そうしたら、わたしの魅力で籠絡してくるのに)」

「……………無理だろ。兄さ

んはそんなものには引つかからねえよ」

「(まーやだ、こじらせてる！)」

「(こじらせてねえ！)」

なぜ、年下であるはずの弟と妹が俺と同学年になるのか、という疑問もあるだろう。その答えは簡単で、学園は年齢を問わないからというものになる。

つまり、試験に合格できるなら三歳だって九十歳だって俺と同学年になりうるのである。ただし、頭脳はともかく、体力的な意味合いで、

実技試験に合格できる年齢となると、それなりに絞られるが。

これが高等部の話だ。

じゃあ中等部は何なのかって話になるだろうが、ここは寄付金さえ積みばやっぱり年齢不問で大概の者は入れる。常識的な基準は示されるし、貴族は大概十二歳くらいから、だけどな。

厳然たる能力によるAからRまでのクラス分けがあつて、文字すら読めない場合Rに入り読み書き算術からやるわけだが、そもそも学園に入れるだけの寄付金を積めるような家の子が読み書きできないなんてことはほとんどない。実質、PからRまでのクラスは外国から移住してきたばかりとか、訳ありばかりになる。

寄付金の積めない貧乏貴族はどうするかだつて？

その場合は、自分の所属している派閥の親分トッブに頼めばいい。派閥の親分トッブだつて、自分の派閥に人数が増えるのは歓迎だから、よつぽど睨まれてない限りは入学金を出してくれる。リターンがあるわけだからな。

そう、学校に入る前から、自分の子供の取り巻き作りつてわけだ。

庶民だつて入れるが、入学前からグループ分けがほとんど済んでいる貴族とは、同じ空間に居ても別の世界に存在しているような感じになることが多い。もちろん野心ある庶民はそこから派閥に参加すべくアピールするし、優秀なやつは派閥側から誘いが入る。

「(でも早く話しかけておかないと、後からはやりにくいわよ。だつて、兄さん人気者なんでしょ。強烈かつ精力的に罫を仕掛ける肉食植物みたいな地属性女の子とか、過剰に前向きで筋肉の暑苦しい取り巻き志望の風属性男の子がやってきたら、グレイみたいな地味……いえ控えめ気質の子は跳ね飛ばされちゃうわ)」

「(具体例すぎるんだが、どこで見たんだ、そんなの)」

「(ついさつき。ここに来る途中よ。どっちも鼻息荒かったわ。ファンクラブ会員なんですって。貴方の兄さん目当てじゃない可能性だつて否定はしないけど)」

「(……………)」

「(あつはつは、変な顔。そんなに嫌なの?)」

「(そんなんじやねえ)」

「(うふふ、こじらせてる貴方も悪くないのよ。少なくとも前の生きた死体みたいな顔よりずっとマシ)」

「(やめろ、撫でるな)」

「(憎しみも恨みも否定しないけど、それはより高みに飛ぶためのたわみとすべきものよ。地に縛られるための鎖ではないわ)」

「(こじらせて、ない……つもりだ)」

妹は、入学自体は俺から遅れて一年後だったが、貴族が利用することはめつたにない飛び級制度スキップを利用して、俺と同じ学年になった。庶民ならともかく、貴族が利用することはほとんどない制度だ。

なんで利用しないかというと、学園には貴族が多くなると言ったな。その性質上、次世代貴族の社交の場でもあるからだ。有り体に言うとうと側近や婚約者探しの場になりうるのだ。

意見は色々とあるだろうが、大概の場合は、友人にせよ、取り巻きにせよ、結婚相手にせよ、時間をかけて探したいという者のほうが多い。

ゆえに、飛び級スキップなんて使って、時間を短縮するなんてとんでもないというわけだ。分かんなくてもない。

それに、少なくとも、学園にいる間は全ての人間と対等だ。格式張った家であればあるほど、学園のほうが安らぐというやつだっているだろう。その逆もいるかもしれないが、これはある意味、最後の自由時間なのだ。

「(そういえば、兄さんって婚約者候補だらけなんですって?)」

「(……らしいな)」

「(確か、才女が好みって噂があるらしいんだけど)」

「(……らしいな)」

「(でも、誰にでも優しいけどつれない態度をとるから、影でこっそりついたあだ名が陽炎フアタモルガーンの騎士ですって。掴めそうで掴めないところかららしいけど)」

「(……ほぼ一緒に行動してるのに、どっから聞いてくるんだよ、そんなの)」

「やだー。わたしの能力がほとんど戻ってないからって馬鹿にしてるわね。人間の表層を舐めとるくらい簡単よ？ 貴方の兄さんみたいに無意識下でも固く守られてると無理だけど、きゃーきゃー言ってる子くらいならね」

「……力が、戻ってるのか」

「ほんの少しね。ここに、わたしの欠片があるのは間違いないと思うわ」

「（そいつは重畳。なら、どこにあるか探さないとな）」

「（ええ、貴方の兄さんに見つからないようにしながらね。よって、情報はこちらから遠慮なく集めるから喜んでくれていいわよ。全部教えてあげる。知りたいでしょー?）」

「うるさい。いや待て、そっぽを向くな。知りたくないとは言ってないだろ」

「（んもう、こじらせてるんだから）」

「（こじらせてねえ!）」

対して、庶民にとつての飛び級制度は、使うやつによって意味合いが異なる。

たとえば、貴族の取り巻きに入りたい。

たとえば、真実優秀で早く研究したい。

たとえば、憧れの人と同じ学年になりたい。

切実な理由からくだらない理由まで様々だ。

ちなみに、俺の一学年下の世代は、男女問わずこの制度を使いたいと希望するやつが激増しているらしい。優秀なのが多くて結構だな。

「（ちなみに、貴方の兄さん、男にもモテるわよ。特に年下の美少年にはすごい人気。きつとこういうのを美少年キラーって言うのね）」

「（……キラーはなんか違うと思うし、知りたくもない情報ありがたくもねえな!）」

「（性的な意味でかどうかは別として、岡惚れっていうのかしら。熱狂的な盲信者っていうの?）」

「（……………）」

「（年下の美少年って、あら、貴方にも当てはまるのね。きつと弟属性

に対する圧倒的有利を持つてるんだわ、あの人)」

「(兄さんだからな。その笑い方やめろ。腹が立つ)」

「(被害妄想ね。可愛げが出て結構って思ってるだけなのに、ぶすくれないでちようだいよ。無表情でも、わたしには分かるんですからね)」
また、飛び級スキップは、優秀さを上級生の貴族にアピールする手段の一つになりうる。

貴族にとって、目に留める基準が一にも二にも髪色なのは説明不要だと思う。どれだけ精霊の血統に近いか、あるいは先祖返りをしていくか、誰の目にも鮮やかな証明だ。髪を染める色粉の発明された三十年ほど前からは、いささか旧弊な価値観となりつつあるが、学園においてその手の誤魔化しをする者はほとんどいない。座学はともかく実技ですぐバレル。

だから、髪色が冴えぬ者は、飛び級スキップや論文発表、研究会や各種大会のランキング、特殊な技術や技能で自分を印象付けようとするわけだ。分かりやすく求められやすいのは「風の耳」とか「精霊の眼」とかだろうな。後天的な精霊の祝福とされる。実際はどうか知らないが、王フォルテイナー族も血統外の王族金髪も得られやすいのは確かだ。もとから精霊に気に入られてる奴ならすぐに得られるということで、精霊の祝福扱いはなんだろう。

ランキングや論文を貴族に対するアピールのためだけに使うのはどうかとも思うが、優秀じゃなきゃ使えないから問題ないのだろうか。

「(あのね、ふと考えたんだけど)」

「(今度はなんだよ?)」

「(同じ教室にいるのに、黙りこくって自己紹介すらしないのもどうなのって思わない?)」

「(……!)」

「(うーん、びっくりした顔でさえ眉毛がびくくとも動かないのねえ。わたしは分かっているけど、誤解には気をつけなさいね。貴方のソレが毒を盛られた後遺症だなんて、他の人は分からないし、わたしと違って直接、貴方の心に接触できるわけでもないんだから)」

「……兄さんは顔くらいで判断しねえし」

「わあ、こじらせ……言い飽きたわねもう」

「(こじらせてないって言ってるだろ)」

貴族はほとんど使わないと言ったが、これにも例外があつて、イグニス家や王家のような取り巻きなど集めずとも勝手に集まってくる、あるいは自家門だけでどうとでもなる家の者は使う場合もある。

婚約者が既にいるのに略奪愛の対象にされたくないとか、研究者気質で既に就職の決まっている三男坊とか、とにかく学園での縁故作りの有益さが少ない者たちも抵抗なく使うだろう。

一応俺もこの制度を使つても構わない一人だが、別の理由で使いたくても使えない。少なくとも中等部の間は使えなかった。

だつて、生徒会長だからな！

役職持ちは使えない決まり、では別にないんだが不文律だな。持っている仕事を中途のまま学年を進むわけにいかない。

弟の作るだろう英雄譚を間近で見たいからあえて飛び級スキップしなかった、そんな理由はあるはずがない、わけがなかった。二重否定。つまり、ある。

「言つておくけど、貴方の兄さんのほうは、最初はこちらを気にしていたわよ」

「(…………)」

「(貴方が顔をそむけて露骨に嫌がるから、構われたくないんだつて思ったみたいね。お気遣いいただいたのよ、たぶん)」

「(…………!)」

「(いつそ、そのまま繊細で気難しい水属性美少年演技で貫き通したらどうかしら。表情筋は文字通りほとんど死んでるといふか殺されてるんだから、クール系は余裕よ。ふふ)」

「(わらうな)」

「(嗤つてはいないわ。貴方の内面との落差を考えると微笑ましいと思ってるのよ。貴方は内面的には、炎の性質なもの)」

「(炎など……いずれ消えるだろ)」

「(それはそうよ。敵を焼き尽くしても消えぬ炎など害悪だわ。でも

ね、燃え種もえくさがある限り、燃え続けるのも炎もえつてものよ」

話を戻して、結論を言うと、庶民は使うが貴族はほぼ使わない。

それが飛び級スキップ制度なんだが、我が妹は追いつくために使った。令嬢友達を選ぶより、結婚相手を選ぶより、俺に追い付きたいと望んだ。俺も鈍くはないので、それが誰を動機にしたものかというのは知っている。

血を吐くほどの努力。天を衝くほどのプライド。選民意識による差別。それらが、優越感によるものなのか、はたまた劣等感によるものなのかは分からない。

けれど、弟を救えなかつた俺が、妹を救えるはずもなく、してやれるのは踏み台踏み台としての先達姿を見せてやることだけ。

悲しいことだが、しようがない。妹踏み台よ、妹悪役よ、妹朋輩よ、妹朋輩よ、これはそういう物語なのだ。

「(それにしても、貴方の兄さん、今、何を考えてるのかしら。ふふ、素敵な横顔よねえ。貴方は凜として水晶の精霊みたいに涼やかな印象だけど、こつちは男性的で精悍で、なのに知的で優雅で、牙と爪を隠して毛並みを整えた炎鷲フログリユプス獅子リユプスのよう)」

「(兄さんをじろじろ見るな。減る)」

「(いいじゃない。だって、利用できそうでしょ)」

「(……? 何を考えてる)」

「(自分の妹さえも、父親に叛そむかせるほど背徳的な美貌。いいわよね。切り崩す良い糸口じゃない?)」

「(ふん、そうかもな。アレは、昔から兄さんしか見えてなかつた。兄さんのこととなると、途端に視野が狭くなる。飛び級スキップなんて、貴族なら普通はやらないことだぞ。ましてやアレの将来には政略結婚しかないのに)」

「(家格上、下野も自由な結婚もないものねえ。端的に言えば、彼女は父親の財産の一つよ)」

「(兄さんのように実力である男を黙らせるだけの能力もないからな。学園にいる時間だけが、真正銘の最後の自由時間だ)」

「(分かっている割には、嫌そうね? 利用するのはかわいそう?)」

「(いいや。アレには特に何も感じねえよ)」

「(ふうん?)」

「(だけど、そういうのは、あの男みたいだ。それは虫酸が走る)」

「(へえ)」

「(甘いと言いたいんだろ。分かってるさ)」

「(いいえ、それは貴方の誇り^{プライド}高さよ。いいと思うわ。私は貴方のそういうトコ好きだもの)」

それにしても、さつきから終焉の精霊(暫定)とじゃれ合ってる弟の表情がほとんど変わらないのが気になる。めつちや気になる。不自然なほどに無表情だ。

無論、俺がここにいるから、あえて表情を作っていない部分もあるだろう。姿を隠している終焉の精霊との念話で表情を変えたら、一人芝居になってしまうからな。

だが、生理的な微表情すら浮かばないのは、いささか妙な気がする。ふと幼い弟を思い返す。表情豊かというわけでもないが、だからと言つて、凍り付いたような無表情など決して浮かべたことのなかった弟の姿を。

俺の訪れに、顔をほころばせて近寄ってきたこともある。父や母に見つかれば叱られるため、庭の奥のしげみに潜り込んで、侍女たちを困らせた。妹に見つかれば、唇を噛んでぎゅつと拳を握り恐れた。別れる時の、次にいつ会えるのかと期待を込めた目つき。再会の約束に握った指の熱さ。手を放すときの長く密なまつ毛の震え。

ふむ、思い返せば返すほど、あんなに可愛い弟^{小動物}に情の欠片も湧かんとは、我が父ながら度し難い。

いや、思考がそれた。

昔は、決して、違和感すら感じるような無表情さではなかったのと言いたかったのだ。

俺は考え込んだ。

もしかして。

もしかしてなんだが。

——遅い中二病だろうか。

俺は早すぎる中二病を患ったが、もしや弟は少し遅い中二病真つ盛りで無表情を貫いているのだろうか。

それを否定しようとは思わない。オレTUEEEEEEEEEものといい、よく分からないけど何かしちやったかなあぎと無自覚テヘペロ系といい、ザマアストリーといい、物語に多少の中二病要素は必要だからな。踏み台転生にだって必要だろう。

俺も大好きだ。転生チート最強ができればと思っていた間は、中二病を極めていたと言ってもいい。一応、卒業はしたつもりだが理解はある。兄は弟を受け入れるものだ。

終焉の精霊が何かを囁いてから、こちらをわずかに気にするような素振りを見せる弟に、鷹揚に見えるよう心がけながら微笑した。いいか、良き踏み台とは、心が広く器が大きく理解力が高いものと心得よ。「うっわ、お兄さん、眩しい」

「や、やはり、気を使わせてしまって……」

「すごいわねえ。少し気が緩んだだけで、フロガグリユプス炎鷲獅子の威圧感が薄れて、かなり親しみやすく見えるわ。身分を隠して下町に下りた王子様みたい」

「何言ってるんだ。兄さんはもとから王子だろうが」

「(こじらせ——)」

「——てねえ！ フォルティナ金に愛されし者として、イグニス炎の精霊直系の家の嫡子として、生まれてるんだぞ。誰がどこから見ても王子様だろ！」

「(ええ、ええ、そうよね。正論なんだけど、違和感があるのはなんですかしら)」

弟(暫定)が眩しそうにかすかに目を細める。

もしや、これはチャンスか。

顔をそむけられたから、話しかけるのを遠慮してたんだが、これは、話しかけてほしいのポーズだろうか。

イイネ！ 若干のツンデレは、主人公としては王道スキルだ。ダークヒーローならなおさらのこと。問題ない。

俺は首の角度を調整した。光の陰影が無駄なく落ちるように、顔の

半分が影となるように、軽く斜めにする。いいか、良き踏み台とは隙を見せず、いつでも高きにあるものと心得よ。少なくとも一流を志すならば。

「はじめまして、俺はウルカヌス・イグニス。せつかくSクラスになったんだ。ともに研鑽に励もう」

「……シルバー・ラクス。こちらこそ、英雄と名高いウルカヌス殿と同じクラスになれて光栄だ。よろしく頼む」

正体など決して勘付いていません、というアピールに「はじめまして」と入れてみた。俺なりに気を使ったつもりだったが、なんだか妙にがっかりされた。顔には出てないんだけどな。肩のあたりが少し落ちたし、全体的な雰囲気も、しょんぼりというか凹んだ感じになったというか。なげだ。

「……兄さん」

「もう、しょうがないわね。そこは喜ぶところよ。バレてないんだから」

終焉の精霊が何かしら慰めるように、シルバーの頭をぽんぽんと叩いた。良い名前だな。幽闇を彷徨う銀月か。

闇の神カオスに創られた終焉の精霊とともに歩む英雄。その意味にふさわしい名だ。

「……いや、兄さんのことだ。もしかしたら見抜いていて静観している可能性も」

「(どうかしらねえ。それをして、お兄さんに何の得があるのよ)」

「(う、ぐ、分かってる、が)」

「(ん、まあ、可能性はゼロじゃないし？ 貴方がそうしたいなら、少し探ってみる?)」

「(探る、だと)」

「(会話中に、さりげなく、兄弟の話でも振ってみたら?)」
「(……)」

「(ほほほ、もちろんもつと仲良くなってからだけだね。貴方が棄てられた事情は知り合ったばかりの他人に話せるようなものじゃないも

の。せめて親友レベルまで行きたいわね)」

「(……あの森に棄てられてからというものの、まともにも口を聞いたのは爺さんとお前くらいなんだが)」

「(あら、セレスタとは普通に話してたじゃない。あ、いえ、ごめんなさい。決して普通にじゃなかったわね。最初は絶対に目を合わせなかったし、常に武器に手が行ってたもの)」

「(あれは、……いや、セレスタには悪いことをした、とは思ってるぜ)」
「(そうね。でもセレスタに会って、貴方は変わったわ。無闇に人を拒絶しなくなつた。表面的にならちやんと会話もできるようになつた。お兄さんとなら、もつと変わるんじゃないかしら)」

なんだろう。さつきから、終焉の精霊と弟がすごく愉快そうなりとりをしている。

他者の念話は、前世の知識で例えるなら電話みたいなもので、第三者には聞こえない。つまり、俺にはどうやっても二人の会話を聞くことはできない。

なのに、どうして愉快そうと表現してるかというところ、黒髪の終焉の精霊の顔がとっても愉快そうだからだ。美しい女に映える悪戯い表情とでも言えば伝わるだろうか。

「(心を開いて話せる人間を一人だけにしておくと、必ず依存することになるわ。セレスタが死んでも立っていられるように、もうちよつと他の人間にも依存対象を増やしておきなさいな。人間は相互依存して生きるように造られてるんだから)」

「(お前たちがそう造つた、ということだろ)」

「(わたしを含めないですよ。でも当然じゃない。個ひとりで生きられる精霊わたしたちだからこそ、群れとして生きるといふことはとっても美しく見えるんだから)」

話は脱線するが、念話というのは第三者通話、つまり複数人での会話ができないわけではない。

ほんの五年ほど前に賢者パラケルススが弟を実験台にして廃人にした事件は有名だが、その折に、実用化に至っている。

簡単に言えば、仲介者を作ればできるといふ理屈らしいが、仲介者

となった者は情報量トラフィックに耐えられず人格崩壊するという話だ。今は専用の人工異質同体生物キメラの脳を使用しているようだが、損耗が激しいため、めつたに使えるものでもないと言え聞く。戦争でも起こらない限りは、封印技術一步手前で温存されるだろう。専用人工異質同体生物キメラを造るたびに、王城の地下牢から人が減るといふ噂もある。原材料は果たして、といったところか。

パラケルススは、口から泡をこぼし意味不明な言葉を垂れ流すようになった弟を抱えて心からの感謝と愛を告げ、一生涯面倒を見ると誓ったそうだ。弟のほうも事前に同意済みだったというから恐ろしい。

愛がないのは問題だが、愛が有りすぎるのも問題だと思う。うん、まあなんだ、愛とは適切な用法用量を守らねばならない劇薬毒でもあるということだろう。我が弟には、なるべくヤンデレヒロインの開拓はしてほしくないものだ。

まあ、うちの弟が、ヤンデレヒロインを上手く制御できないわけもない、と俺は心から信じている。頑張れ弟よ！英雄

俺はゆつたりと微笑んだ。

「うーん、貴方の言うことも分かるような気がしてきたわ。同クラスになったってだけで、見知らぬ年下の男に、こんなに慈愛に満ちた表情を最初から見せてくれるものかしら」

「……兄さんは昔から優しい人だった」

「ええ、それはそうでしょうけどね。でもねえ、こんな宗教画の聖人みたいな表情って、普通、他人にしないしできない、と思うのよね。いえ他人だからこそか、と思わなくもないのだけれど」

「(そうだな。昔はもつと快活で太陽のように笑う人だった、ような気がする。あんまり定かじゃねえが)」

「(貴方、そういうえば、記憶も一部飛んでるんだっけ)」

「(うん。何かにつけて俺に会いに来てくれたり、何くれとなく面倒を見てくれたのは覚えてるんだが)」

「(ふうん。可愛がってもらってたのね)」

「(ああ。あの頃は兄さんだけが、俺を人間として家族として見てくれ

た。愛してくれた。だから俺はまだ人を憎まずにいられる。あの家だけだ。怨んでるのは)」

「(そう。だから、最初に遇ったとき、お人形げぼくにできなかつたのかしら。あれは絶望した人間にはよく効く術なのに)」

「(…あの脳に針を刺したような激痛は、一生忘れられねえよ)」

「(いやだわ、まだ怒ってるの。そのおかげで貴方は力を目覚めさせられたのだし、今のわたしは貴方の最高の相棒パートナーじゃないの)」

「(だから、軽口として言えるんだろ)」

「(えええ、今の、本気に聞こえたわよう)」

弟が終焉の精霊の機嫌を損ねたらしい。

じゃれあうように終焉の精霊が、弟の頭に噛みついた。すごいんだぞ。見惚れるほど優艶な美女の口がカパツと裂けて頭を半分くらい飲み込む姿は、驚きを押し隠すだけでも一苦労だ。

おそらく一部分だけの形状変化なんだが、そういうことができるってことは、あれ、本体じゃないな。おそらく何がしかの依り代があって、そこから姿を出力しているだけだろう。

日常茶飯事なのか、弟は慌てず騒がず表情を動かさず、軽く肩だけを動かして抗議している。

これを見るに、終焉の精霊の封印は、全て解けているわけじゃないだろう。終焉の精霊の本体がどこにあるのか分からないが、わざわざ依り代でくつついてくるのは、本体が移動できないからと見た。

あるいは、本体はまだ解放できていないのかもしれない。

俺は、封印魔法についての知識を脳内探索した。封印魔法は専門ではないが、この学園都市のどこで、それに触られるかくらいは元中等部生徒会長として把握している。

むろん弟がこの学園で探すだろう知識に先んじて触れておくためだが何か。

俺は、弟のためなら、図書館ナレッジフェアリーの妖精になることも辞さない。いいか、良き踏み台とは、タイミングを見計らい主人公を強化するために最も役に立つ存在と心得よ。そのための努力は欠かせない。

ちなみに、この世界には図書館ナレッジフェアリーの妖精は実在する。大概にして性格

は温厚で落ち着いているが、決まりに厳格。本を汚したり破つたりすると、打撃棒メイストックを持ってぶち殺しに来るから気を付けたほうがいい。ちゃんと事前に釈明を聞いてくれるので、やむなき事情があった場合は、説明すれば、お説教だけですむこともある。ただし、推理小説の犯人を、1ページ目に書くなんてことをした場合はず間違いなく死ぬまで追いかけてまわされるから、先に遺書を書いておけ。

本屋や、所蔵量が多い個人の屋敷に棲んでいる場合もある。その場合も凶書館ナレッジフェアリーの妖精と呼ぶが、一か所に二体存在することはない。

そういえば、弟はこの学園の凶書館に行つたことはあるのだろうか。博物館や美術館と併設されており、見ごたえはそれなりにあると思う。ただ、1日あつても回りきれないほど広いのが玉に瑕かもしれない。もちろん好きな人にとっては天国に等しいだろうが。

「シルバーは外部入学だったな。凶書館を利用したことはあるか？」
「いや、どこにあるかも知らない」

「それなら今度案内しよう。あれは一見の価値はある。せっかく来たのに、まだ見ていないのはもったいない」
「そうか。ありがとう」

はにかむように、ぱちりと上下した瞼の下の瞳は髪より少し濃い青。弟はすっかりかつての外見を捨て去っている。ほんの少しの寂しさを噛み殺しながら、俺は考えた。

せっかく出かけるのだ。ここはやはり、禁呪書架の担当にさりげなく引き合わせてやるべきだろうか。資格がなければ入れないし、貸し出しなど以外だ。何かを探すにしても担当者と伝手があるに越したことはないだろう。

あるいは、隣り合った博物館の呪物区画に連れて行くのはどうだろう。ある程度、自分で身を守る人間しか入ってはいけないので、立ち入り制限されている区画だ。だが、Sクラスに所属していると俺が紹介すればおそらく問題ない。

そこまで考えて、ピンと来た。

むしろ、なぜすぐに分からなかったのか。

そう、俺踏み台と弟英雄が一緒に出かけるんだぞ。これはもしか、イベントで

はないのだろうか。

ありうる。大いにありうる。

俺は一人頷いた。

つまり、禁呪書架に行けば魔本から選ばれ、呪物区画に行けば呪妖が暴れたりたりするかもしれない。

そう、英雄の学園編最初のイベントに立ち会えるかもしれないのだ。これは、もしや、意外と、重要なんじゃないか？

「録画機カメラを用意しなければ」

「えっ？」

「いや、なんでもない。出かける話だが、もし他にも行きたい場所があるなら案内するぞ。大抵のところは分かるから、遠慮なく言ってくれて構わない」

伊達に、元中等部生徒会長じゃありませんので。

弟の雄姿を残しておかなければと考える一方、学園に出る被害を最小限に抑えなければと頭の片隅がささやく。

むろんのことだ。俺は弟の役に立ちたいとは思っているが、この学園を積極的に害そうとは思っていない。必要以上の犠牲は不要なもの。

何も起こらず無事に出かけられればいいが、被害を抑えるためでもある。一応仕込みもおこう。なに、大したものじゃない。”こんな事もあるか”用意しておくだけのこと。

「おい、見ておきたいものはあるか」

「そうねえ。見ておきたいものというより、全体的な構造を知りたいわ。地図と比較したいのよね」

「(矛盾を探す、と)」

「(そうよ。隠されているものを探すには、面倒だけど、自分の足でたどったものが一番信用できるもの)」

「(お前は時々人間じみている)」

「(そーお？ いっぱい食べたからかしら。それとも封印を解くのに手間取ったからかしら)」

「(悪食め)」

「大丈夫よ。貴方はせめて五十年以上経ってからにするわ。すぐくすぐくすごく美味しいでしょうけど、そういうのは、待つのだって楽しいものなの」

闇の精霊の目は、宝物を抱えた少女のように無邪気で、弟への視線は優しさと愛おしさに満ちている。

不可解にも、弟はそれを眺め少々冷ややかな目つきになった。

もしや、長きにわたる苦境で、愛を素直に受け取ることができなくなっただろうか。無理もない。本来なら最も愛してくれる家族から冷遇された記憶は、おそらく傷以外の何物にもならないだろう。

ただ、もしそうなら、今後のハーレム生活にも差支えが出るかもしれない。解決に手を貸すのもやぶさかでないぞ。いいか、良き踏み台とは、常にバッドエンドフラグ感知力を研ぎ澄ませ、時に自らが身代わりになつてもバッドエンドを予防する存在と心得よ。無論最低でもグッドエンドを目指すべきであり、ノーマルエンドでの妥協は踏み台の恥と知れ。

「その、ウルカヌス殿。俺は詳しくないので、どこに行きたいかすらよく分からなくてな。おすすめのところを案内してくれるか」

「もちろんだ。良かったらウルカヌスと呼び捨ててくれ。二人しかないんだから、堅苦しい話し方もしないでいい」

「嬉しい言葉だが、節度というものがある。貴方のファンに刺されてしまう」

「……同性でもか」

「男には男の嫉妬というものがあるからな」

弟はわずかに苦笑した。

どうにも、何かを実感したというか、思い返したような苦笑だった。若干、俺は動揺した。どういうことだろう。この無表情なりの苦い顔。もしや、知らないだけでどこかにヒロイン♂がいるのだろうか。いやもちろん信条に変わりはない。弟に降り注ぐ愛は多ければ多いほどいい。愛に貴賤はなく、性別も関係ない。だから、いい。

いいんだが……ヒロイン♂か。そうか。

そう……うん、うん偏見は良くない。平等にヒロインとして態度を

変えず接するよう心がけよう。いいか、良き踏み台とは、偏見や差別なく理解ある態度をとるものと心得よ。主人公の味方である間はな。「お兄さんと一緒のSクラスが貴方だけって知られてから、殺意がすごかったわねえ。男女問わずだけど、女の嫉妬より、男の嫉妬のほうが殺意が高いつてどういうことかしら」

「(単に暴力的なだけだろ。女の嫉妬だって悪意に満ちてたぞ)」

「(そうねえ。ハサミで切り刻まれてたら女、素手で引き裂いた様子だったら男っていう区別くらいよね)」

「(腕力の差しかねえ)」

「(あら、ハサミをわざわざ持ってきてまで、あなたのマントを切り刻むあたり執念が違うわよ。素手で引き裂くのは怒りのあまりの条件反射でしょうけど)」

「(…：お前が食ってきた男って、筋肉のゴリウラばかりだったりする?)」

「(何の話よ)」

「(怒ったくらいで、全ての男がマントを素手で引き裂けると思うな。怒ったくらいで全ての男がマントを素手で引き裂こうと思うなんてことだ)」

「(まあ。最近の男が貧弱なのか、マントの品質が向上したのか、どっちなのかしら)」

闇の精霊の目が丸くなっている。驚いたゴリウラのような。愛らしいが、たいていのゴリウラは驚いた後怒りだすので、あの顔には困った思い出しかない。

ゴリウラというのは、前世で言えばゴリラの体に、猫の頭をくつつけたような生き物だ。性質は社会的で人に馴れやすいが、やや臆病で腕力が人間の5倍だから、暴れだすと厄介。なかなか人気のある動物なんだが、取り扱い注意でもある。

そうだ。

魔法生物飼育学科で、ゴリウラの飼育もしていなかっただろうか。

もし、弟が興味を示すようであれば連れていってもいいかもしれない。

俺は弟に全てを見せてやりたい。本来なら、幼いころに与えられて当然のものを全て与えてやりたい。

兄として当然のことだ。

そして、俺は、幼いころ、その兄として当然のことをしてやれなかった——助^英けてやることすらできな^なかつた男^たなのだから。

学園案内の脳内予定に追記する彼は、^兄まだ何も理解していない。

”家族から冷遇された記憶は、おそらく傷以外の何物にもならない”なるほど、たしかにその通り。捨てられた記憶はいつまでも傷跡として残るだろう。

だが、

「ふうん、愛の記憶って厄介なのよねえ。代わりがないならなおのこと。心奥に刻まれていればさらになお。壊しにくいし、上書きも難しいもの」

「(……奪う気か)」

「(やあだ。信用ないわねえ)」

冷たさしかない過去の中、たった一つの日溜まりの記憶がどれだけ大切か、それは与えられた者にしか分からない。

兄の気持ち^が兄にしか分からないように、弟の気持ちは弟にしか分からない。

踏^兄み台^弟が英雄^弟に与えたささやかな^{愛情}ものが英雄^弟を救わなかったなんて、そんなことが誰に言えるだろうか？

「(大丈夫よ。せつかく得た相棒を壊すの、もつたいないでしょ)」

「あの森から出た今なら、相棒くらいいくらでも選べるだろう」

「(貴方以外は要らないからこそ、ちよつぴり奪う方法を考えちゃっただけよ。略奪愛は精霊の嗜みよね)」

「(ろくでもないな。精霊の嗜み)」

「(ふふ、あの人ごと手に入れちゃえばいいんだから、大丈夫よ。奪わないわ。……こわい顔ね)」

そう、孤独という渇きにもたらされた温もりの一滴。持たざる者の一灯。

そんなものを人は――

「(人脈作りとハーレムのために、俺の友人達にも紹介しなければいけないな。男女問わず見目麗しく愛情深い人から回るか)」

――人は、暗闇を駆け抜ける勇気をくれたのはあなた唯一と呼んだ。